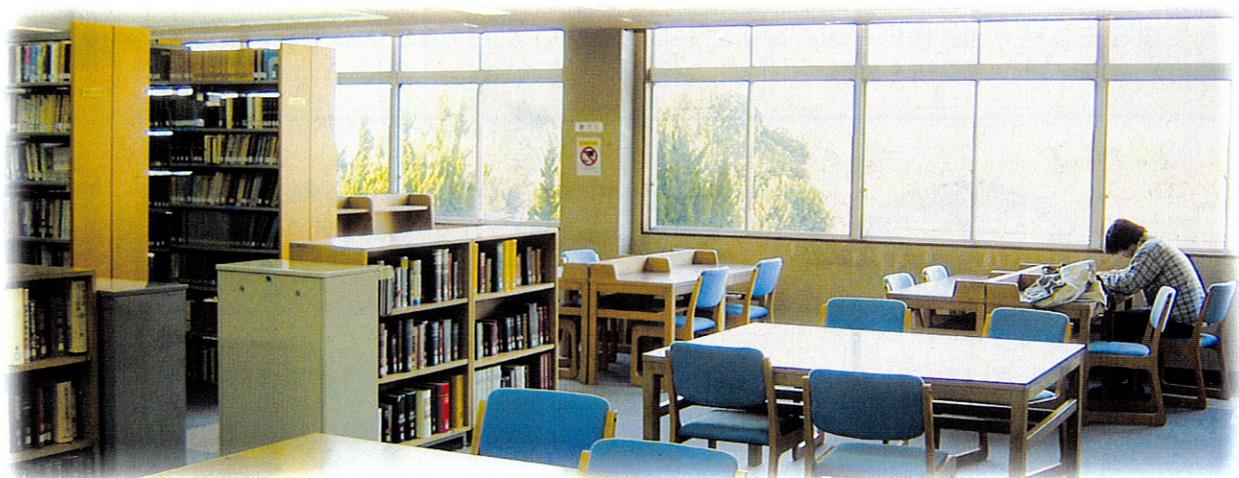


図書館報



- 特集 図書館紹介…………… 2～3
- 展示美術品紹介…………… 4～7
- 読書感想文コンクール…………… 8～14
- 図書館統計…………… 15
- 郷土の文化財・編集後記…………… 16

卷頭言

図書館長 燃山廣志

今年四月より前任の瀬戸館長より図書館の仕事を引き継ぐことになった。赴任早々、尾崎学校長より図書館一階の改装の依頼を受けた。瀬戸館長時代には図書館二階の閲覧室、セミナー室の改装が実施され立派に整備されている。一方、図書館一階から、二階にかけての通路壁等のスペースを利用した美術ギャラリーが、大牟田市美術協会の会員の方々の全面的な協力のもと、新谷図書館長時より充実がはかられて来た。そうした流れの中で部分改装としては最後の大仕事とも言える難題を引き受ける事になってしまった。図書館棟の顔ともいえるスペースを、より有明高専らしい印象でまとめるにはどうしたらよいのか、大変な思案を要した。図書係長の青木氏と二人三脚で多くの人々のご助力を受けながら何とか今秋の完成・披露までたどり着くことが出来た。夏の酷暑の中で青木係長と搜し求めた家具が、現実にロビーに置かれ、そこが憩いのスペースとして活用されているのを目にするにつけて、ある種の感慨がこみ上げて来る。

と、一方でこうした図書館を取り巻く外的な環境の整備が進むのに比例して、図書館本来の機能である図書の充実といったソフト面がどのように進められているのかに目を移すと、いささか心許ない。大幅な予算削減が遂行されている中で、図書館費とて例外ではない。こうした厳しい現実においていかに学生や教職員のニーズに適う図書を充実させて行くべきか、今までにない英知の結集を求められている。

かたや、地域に根差した図書館としての活動も一層強めて行かなければならない。有明高専の図書館ロビースペースに設けられた美術ギャラリーが、本校学生の情操教育に貢献できること以上に、地域の方々への文化貢献の一助になれる事を願ってやまない・美術作品鑑賞に本校を訪れて頂きその足で図書館内の図書探索にも時間を割いて頂けるような光景の実現の為の多くの皆様方からの一層の御支援をお願いし赴任の挨拶にかえたい。

特集

図書館紹介

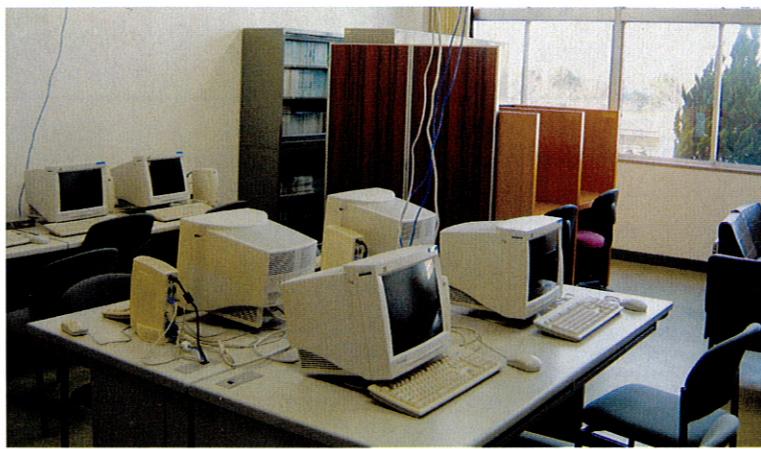
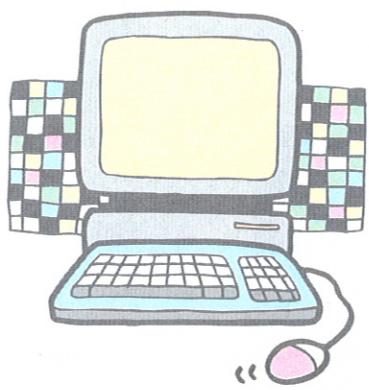
図書館では今年度1階ロビーの大幅な改修を行いました。また、併せて大牟田美術協会の御協力を得て、展示しているギャラリーの作品を大幅に入れ替えました。



ギャラリーよりロビーを望む

ギャラリー





2階A Vルーム（旧セミナー室）には利用者用インターネット端末を14台設置しています。また、AVコーナーをDVD視聴対応にしました。



ロビー

ロビーは青を基調とした色合いになっており、テーブルとイスは地場大川で購入した手作りのものです。木独特の暖かな感触と座ったときのかっちりとした感触をぜひ実感して下さい。



新セミナー室

新セミナー室が2室できました。パーティションによって、部屋の広さを変えつついろんなパターンでの利用が可能になっています。

展示美術品紹介

MARO-赤い靴

石井 保



製作年作品区分／2003 油画(油彩)
作者略歴／大牟田美術協会会員
社団法人創元会準会員
鷹尾氏に師事
大牟田美術入選、連続出品
代表作／「MIKE(三川鉱)」
「祭りの日」

三人

奥苑和司



製作年作品区分／1985 日本画
作者略歴／福岡県美術協会会員
大牟田美術協会会員
代表作／福岡県展出品作
会員展出品作など

未来からの贈り物。そして希望…

木戸直道



製作年作品区分／2004 油画(アクリル)
作者略歴／日仏現代美術展(福岡放送賞)
現代日本絵画展(大賞・宇部興産賞)
青木繁記念大賞展(優秀賞)
トリックアートコンペ(ランブリ・優秀賞)
アーチ大賞展(優秀賞)
現代美術小品展(最優秀賞) 他
代表作／「塊」そして未来へ…

光の中で

清水清子



製作年作品区分／1994 染織
作者略歴／福岡県美術協会会員
大牟田美術協会会員
社団法人太平洋美術会会員
(染織部審査員・準代表・理事)
太平洋美術会展優秀作賞
文部大臣奨励賞
代表作／「回想の譜」

面浮立

末藤武輔



製作年作品区分／2001 写真
作者略歴／大牟田美術協会会員(理事)

禅寺にて

久野脩



製作年作品区分／写真
作者略歴／
全日本写真連盟顧問
大牟田美術協会会員(顧問)
国際芸術写真連盟(ベルギー)
荣誉称号 エクセレンスFIAP
代表作／国際写真サロン
入選作

天日干し

蓮尾至誠



製作年作品区分／2002 写真
作者略歴／全日本写真連盟会員
大牟田美術協会会員(副会長)
オームタ35クラブ企画
代表作／「火の山(普賢岳)」
「太古の夜明け(吉野ヶ里)」
「仙酔峠のミヤマカリシマ」など

御田植祭

甲斐友行



製作年作品区分／2000 油画
作者略歴／全日本写真連盟会員
大牟田美術協会会員
代表作／「干潟(宇土半島)」

夢一夜

鶴由海子



製作年作品区分／
2000 染織(革)
作者略歴／
大牟田美術協会会員(理事)

二月早朝(阿蘇)

加治屋陞



製作年作品区分／
2004 油画(油彩)
作者略歴／
大牟田美術協会会員(会長)
元水彩連盟会員
新制作展入選
代表作／「朝陽・阿蘇」

花紡ぎ

木村和子



製作年作品区分／2003 洋画
作者略歴／日本美術家連盟会員
大牟田美術協会会員
代表作／花がテーマの作品

生生世世

永松亨



製作年作品区分／日本画
作者略歴／福岡県美術協会会員
大牟田美術協会会員
代表作／「回想の譜」

ぼけの実

黒田時三郎



製作年作品区分／
洋画(油彩)
作者略歴／
大牟田美術協会会員

朝かけの日曜日

高山政男



製作年作品区分／
2004 洋画(油彩)
作者略歴／
青々水彩会員
大牟田美術協会会員

ばら

永田恒久



製作年作品区分／
洋画(油彩)
作者略歴／
大牟田美術協会会員

琉球紅型

河上導道



製作年作品区分／
1998 洋画(油彩)
作者略歴／
大牟田美術協会会員
日本美術家連盟会員
二科展入賞
二科西人社展入賞
福岡県展入賞
員選賞選
代表作／「祭りの日」

牡丹

小川研



製作年作品区分／日本画
作者略歴／
大牟田美術協会会員

カーニバル

江崎マツ



製作年作品区分／1998 洋画
作者略歴／
大牟田美術協会会員
代表作／「舞」
「アンダルシア」

碑

皆島万作



製作年作品区分／彫塑
作者略歴／無所属
大牟田美術協会会員

溶接実習場

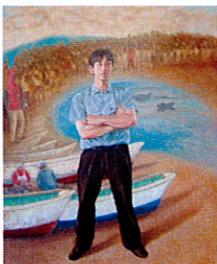
木下潤



製作年作品区分／2000 日本画
作者略歴／
大牟田美術展美術協会賞・教育委員会賞
福岡県展入賞
国民文化祭入賞
福岡県美術協会会員
大牟田美術協会会員
代表作／「晚秋」

宝の海

永井正文

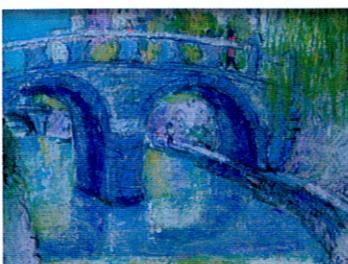


製作年作品区分／2002 油画(油彩)

作者略歴／水彩展 OHARA 入賞
西日本美術展奨励賞
日本水彩展第1席
大牟田市文化連合会文化功労賞
日本水彩画会会員
瑠璃玻璃会会員
大牟田美術協会会員(理事)
青々水彩会会員
代表作／「Life(青春)」

眼鏡橋

岩本久子



製作年作品区分／洋画(油彩)

作者略歴／
大牟田美術協会会員

雪景の九重連山

大山好美

製作年作品区分／
2003 油画

作者略歴／
創元会準会員
大牟田美術協会会員
代表作／「阿蘇」

椿の里

黒田真理子



製作年作品区分／洋画(油彩)

作者略歴／
大牟田美術協会会員

バイパスの見える風景

菌田日出生

製作年作品区分／
2004 油画(油彩)

作者略歴／
坂本繁二郎氏を囲む勉強会参加
西部美術展・福岡県展・
二紀展・春陽会展出品
大牟田美術協会会員
青々水彩会会員

秋の山路

坂口勝夫



製作年作品区分／洋画(油彩)

作者略歴／
大牟田美術協会会員

漁村

春口幸雄

製作年作品区分／
洋画(油彩)

作者略歴／
大牟田美術協会会員

黄衣の人形

鶴秀海

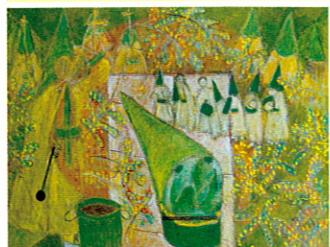


製作年作品区分／洋画(油彩)

作者略歴／大牟田美術協会会員

ミモザの頃A

黒田真理子



製作年作品区分／洋画(油彩)

作者略歴／
大牟田美術協会会員

からすうり

今村愛子



製作年作品区分／2002 日本画

作者略歴／福岡県美術協会会員
大牟田美術協会会員
(理事・展覧会委員)

代表作／「秋韻」
福岡県美術展知事賞

語らい

濱田敬子



製作年作品区分／1995 染織
作者略歴／大牟田美術協会会員

薰風

宗美津子



製作年作品区分／1997 染織
作者略歴／大牟田美術協会会員

のどか

田中千鶴



製作年作品区分／1998 日本画
作者略歴／
大牟田美術展美術協会賞・市長賞
福岡県展入選
大牟田美術協会会員(展覧会委員)
代表作／「苔」
福岡県展入選作

消えゆく立坑

寺田晃洋



製作年作品区分／日本画
作者略歴／日本美術協会院友
大牟田美術協会会員

狩人～bird～

塚本和美



製作年作品区分／
2002 油画(アクリル)
作者略歴／
二科会所属
二科会西人社同人
大牟田美術協会会員(展覧会委員)
代表作／
「狩人シリーズ(1993-2003)」

雷魚とコンビナート

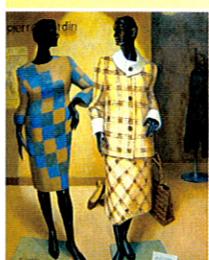
黒田憲之



製作年作品区分／1972 油画(油彩)
作者略歴／
大牟田美術協会会員
日本美術家連盟会員
ウィーンハプスブルグ芸術友好協会
宫廷芸術会員推薦
代表作／「サンマルコ」

語らい

院丸憲之



製作年作品区分／2004 油画(油彩)
作者略歴／
鷹尾氏に師事
大牟田美術展入選
創元展覧会員新人賞
創元会会員(運営委員)
大牟田美術協会会員(展覧会委員)
代表作／「Boutique "F"」

チンチョンの風

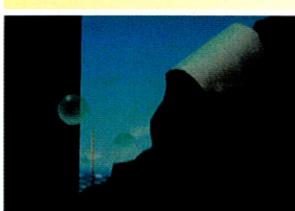
松尾正勝



製作年作品区分／2000 油画(油彩)
作者略歴／創元会準会員
大牟田美術協会会員
青々水彩会事務局
代表作／「甘木山幻想」

未来へ…

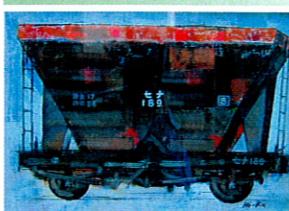
木戸直道



製作年作品区分／洋画(アクリル)
作者略歴／
大牟田美術協会会員

炭車

黒田憲之



製作年作品区分／洋画(油彩)
作者略歴／
大牟田美術協会会員

校内読書感想文コンクール

審査所感 図書館長 焼山廣志

インターネットやEメール全盛の中で生きる我々にとって、これらのツールは”群れる”ことを嫌いながら、一方で”孤独””孤立”を極度に恐れる現代人の深層心理に巧みに分け入り歓迎されている。先日の新聞誌上にも携帯電話が若者にいかに浸透しているかの調査分材が載せられていた。

こうした現況において、今の若者にとって「読書する」意味は何だろうか。

「読書」には書物とそれに対峙する一個人の魂の交感を一途に求める厳しさが存する。そしてそれを手中にしたものが、真の「書との邂逅」の喜びを体験出来るのである。

今年もこうした努力した若者がこの有明高専に多く存在した事に大きな希望の光をみる。ただ、その思いを文字に写すという行為には、また新たな情熱が求められる。

今年はその情熱がやや薄まっているように思えたのがいささか気掛かりである。

十九歳の綿矢りさ氏の『蹴りたい背中』が上位作品に多く選出されたのも、今の学生気質と重ねると深く考えさせられるものがあった。

以上が審査を終えての概評だが、以下今年の読書感想文コンクールに関しての補足すべきことを若干述べてみる。

今年の読書感想文提出者総数は672名。その中で第三次審査にノミネートされた作品は39篇。各学科代表の審査員の先生方による審査の結果、最優秀賞1名、優秀賞2名、佳作9名を今年度は表彰することに決めた。今年は3年生の健闘が目を引いた。一方で、例年に比して、1・2年生の入賞者数が、応募者数に較べて少なかったのが惜しまれる。次年度で更なる精進を期したい。

審査員講評

電気工学科 塚本 俊介

初めて、読書感想文の審査なるものを経験した。最初は義務的に作品を読み始めたのだが、最初の作品から僕の心に突き刺さった。2作目、3作目と読み進めていくほどに、若人の気持ちが伝わってくる。いつの間にか作品に引き込まれるように、一気に30数編を読み終えた。

うまい文章を書く学生にも感心するが、感じたそのままをストレートに表現したフレーズが新鮮で、青春を忘れていた僕の心に、何十年ぶりかに青春を感じさせてくれた。やっぱり読書はすばらしい。

共通専門 河村 豊実

多数の読書感想文を一度に読むことは初めてではありませんが、いつも文章を読むたびに基準が揺らいで、どのように選べば良いのか悩んでしまいます。一つの作品にも各人各様の読み方があり、それに応じた作品のテーマへの様々なアプローチの仕方があるからです。

作品の主人公の紹介、物語の背景・内容などを解説した、作者への感想も見受けました。主人公と同じ世代、生活環境にあり、自分の経験と重複させて共感・反感するところが多く受け入れられたのか、若い作者の作品の感想文が多数ありました。

一般教育科 岩本 晃代

今年は『蹴りたい背中』や『十七歳』をはじめ、主人公が同世代の作品を対象とした感想文が目立ちました。一方、『鼻』や『人間失格』、『野火』などの名作を対象としたものも多くあり、課題図書が広く読まれていることを実感し嬉しく思いました。

作者が苦労して作り上げた作品に全力で向き合うためには多くの苦しみが

ともないます。だからこそ優れた感想文には作品と絡めた跡が読み取れ、その作品と同様に「読ませる」力が宿るのです。みなさんにも、優秀作品を読んで、そのパワーを感じ取ってほしいと思います。

一般教育科 三戸 健司

私の思い違いかもしれませんのが今回の読書感想文は、前回、前々回に比べるとややインパクトが薄れたような気がしました。それでも最終審査に残った作品の中には、こちらが見習いたくなるような、表現力の高く、感動を与えてくれたものがありました。感想文を宿題だと考えて、安易に短編に飛びつき書いた感想文はあまり面白くありません。

本年度から図書館に読書カードを置いています。積極的に利用しながら、今後は少し長めの書物にもトライしてみませんか。そして少しでも感動したら、それをさらにじっくりと二度、三度読んでみませんか。あなたの素直な感想が読み手をも感動させるかもしれません。

機械工学科 猿渡 真一

二次審査を含めて40数編の感想文を読みましたが、作品としては『蹴りたい背中』、『鼻』、『夏の庭』などが多く、学生諸君が個性とか人の心とか友情などに深い関心を持っていることがわかりました。また、戦争の悲惨や恐怖にも目を向けていることもわかりました。

感想文も良く書かれているものが多く、作者の心情や伝えたいことを読み取るだけでなく、それらに対する自分の気持ちや考えをしっかりと述べ、さらにそれを今後に活かそうとしていることに感心しました。ただ、5年生からの感想文が5編しかなかったのは残念で、次年度は多くの人に出て欲しいと思いました。

入賞者

■最優秀賞 電子情報工学科

3年 津崎 英里

『晩年の子供』を読んで

■優秀賞 物質工学科 物質工学科

3年 山本 南 康洋

『春琴抄』を読んで
『夏の庭』を読んで

■佳作 建築学科 機械工学科 機械工学科 電子情報工学科 物質工学科 建築学科

5年 吉田 沙織
4年 原口 直也
3年 岩崎 真人
3年 志垣祥太郎
3年 渡辺 千華
3年 荣 寛子
2年2組 乗富聰一郎
2年5組 谷口恵利佳
1年 田中理佳子

『見知らぬわが町』
『アンネの日記』を読んで
『野火』を読んで
『蹴りたい背中』から
『こころ』を読んで
『蹴りたい背中』を読んで
『宣戦布告』から
『人間失格』を読んで
『赤毛のアン』を読んで

物質工学科

入賞作品紹介



『晩年の子供』を読んで

3年 電子情報工学科 22番

津崎英里

「私は、かつて晩年を迎えたことがある。」

冒頭の一文を読み、この作品が訴えかける何かに触れたような気がした。この作品は女の子を主人公とする八つの短編集だった。子供の視点からの「死」を感じさせ、その中に愛・希望・絶望などが織り交ぜられた複雑だけれども淡々と語られる作品となっていた。

『晩年の子供』の「私」は飼い犬に手を噛まれ、自分は狂犬病になったと思い込んでいる。そして自分が今「晩年」であると早合点し勝手に死を受け入れてしまう。その立場で今まで生きてきた世界を見つめ直していく。

彼女の目から見た世界の様子は、美しく愛が詰まっていた。彼女は十歳の子供とは思えないほどの哲学的な角度で世界を見つめる。いや、子供だからこそ「日常生活」という枠の外から世界を眺めることが出来、なおかつそれを積極的に見つめることができたのだと私は思う。

子供は平気で現実を疑う。しかし、その一方で素直に現実を信じてしまう。他人の言葉よりも自分で見聞きしたものが絶対なのだ、と信じるだろう。大人になっていくにつ

れて徐々にそういう世界の確かめ方を、失っていく。ちょっと賢くなつたつもりになって、先入観や偏見でわかったようなふりをしてあらゆる物事を知識から先に追いかけてしまうのだ。そのことを踏まえ、考えてみると、物事の真相を手に出来るのは一子供なのかもしれない。

私たちが日頃つまづいてしまう、とりとめのこと、愛情や人を思いやる気持ちなどそれらが「存在する意義」を手探りで探しに行けるのは子供の特権だと思う。純粋にわからないものをわからないと告白し、わかるようになるまで追求できたら、また心の中にあるモヤモヤした感情を取り除くことが出来るなら、ということを考えさせられた。

子供の頃、手にした胸の高鳴りや、見つけ出した「ホントウ」のことは徐々に忘れていく。いや、何かと引き替えに失っていくのかもしれない。それが大人になるということなのだろう、とほんやり思う。

「死」というものが目前に迫ってくると、人は大胆になってしまふものなのだろうか。大胆というよりも遣り残すことがないように必死にもがいでいるように見える。底のない沼に落ちた時のように、もがけばもがくほど苦しくなってしまうそうだ。

私は「死」を迎えるまでに、やりたいことをすべてやっておければと思う。今しか出来ない、そして今だからこそ出来る。そういった一瞬を大事にしていきたい。今を精一杯生きていこうと思う。

今はまだ「死」というものに対し、恐怖心はない。だが、歳を重ねていくうちに向き合わなければならぬ壁となり、私の前に立ち塞がるだろう。



『春琴抄』を読んで

3年 物質工学科 38番

山本弓

私はこの本を読んだ時、ふと三島由紀夫の『金閣寺』を思い出した。主人公の美への執着心からか。或は、永久不滅である金閣寺の美と同じ炎で心中することで対等の関係になろうとした『金閣寺』の主人公と、幼い頃から主従関係であり、師弟だった関係を越え、自らも愛する者と同じ盲目となり、極上の幸せを得た佐助に、どこか同じ所を感じ、憐憫の情にも似たものを感じたからかもしれない。

もしも私が佐助ならば、自らは仕える盲目的春琴がいくら琴に秀でていたにしろ、いくら姿が端麗にして高雅であったにしろ、彼女が他の弟子にその美貌を傷つけられても、それが破壊される前の面影を脳裏に保有し続ける為に、自らの目を針で刺し、盲目になったりはしない。いや、私には出来ない。彼がその行動を当たり前の如く遣り遂げた時、私はあまりの生々しさに鳥肌が立った。著者の文章の巧みさだけではない。現実に目を閉じてでも永劫不变の観念境へ飛躍し、過去の記憶の世界だけに生きる事と決めた佐助。一体何が彼を今までさせたのか。

この小説は『鷺屋春琴伝』という小冊子を基にして書かれたものである。谷崎がなぜこの物語にひかれたのか分かる気がする。谷崎の小説を読むと、いつも斬新な芸術性と、その個性、そして志向探求心に敬服するのだが、一方で、あ

る所病的な、その官能への没入は、いくら芸術とはいえ無気味に思える。それはこの作品にも感じられ、佐助は美の陶酔の中で、異常とも言えるほどの執着心から、自らの目を針でつき、未来永劫の美を手に入れたのだろう。

もちろん、春琴への深い愛が彼を盲目にしたのだとも思う。彼に、同じ世界で生きる事となって、極楽浄土にでもなったように思われると言わせた春琴を羨ましくも思えた。佐助は死んでも自らの小さな墓を春琴のものと寄り添わせたそうだ。死後も続く彼の忠実な愛情と畏敬には、美への陶酔を越えた眞の愛を感じざるをえない。

私がこの夏この本を選んだ理由は単純で、粗筋を読んで献身的に奉公する佐助を想像した時、母の姿が思い浮かんだからである。実際はあまりに掛け離れすぎていて、佐助と母が重なるどころではなかった。しかしそう考へてみると、一つだけ佐助に母を思わせる所があった。それは彼の春琴への愛情である。自分の人生をやっと振り返る事が出来る様になった今、改めてこの十九年間の人生は母がいたからこそあるものだと思う。人並みの反抗期もあったし、人とは違う障害まで持った。それでも笑って支えてくれた母の深い愛情にはいくら感謝してもし尽くせない。そしていつも人は何故こんなにまで人を愛せるのだろうと考えさせられる。母と子だからか。それなら佐助と春琴の愛はどう説明すればよいのだろう。もしかしたら、人間の愛情というものはこの世の誰にも説明できないものなのかもしれない。人間とは本当にすばらしい。改めて、人間として生まれる事が出来て良かったと思う。今回、そんな当たり前のことであるにもかかわらず、人々が忘れがちである一番大事な事を思い出させてくれたこの本と著者に、そして何より私をここまで育ててくれた母に心から感謝する。



『夏の庭』を読んで

3年 物質工学科 31番

南 康 洋

この作品を読んで、僕は「変わるもの」と「変わらないもの」という二つのことについて深く考えさせられた。この物語は初め、「人の死」に興味を持った少年達が「死」を目撃するために、ひとりの老人を観察し始めるところから始まる。老人はテレビを見て、コンビニのお弁当を食べて寝るだけというような、まるで生氣のない日々を送っていた。

ところが、少年たちの観察が続くにつれ、老人の生活に変化が起こり始める。よく外出するようになり、散らかっていた庭を片づけ、料理をするなど、日を追うごとに元気になっていく。そして、少年達の観察も、いつしか老人との交流へと変わっていき、さまざまな変化を老人と少年達にもたらした。老人が若いころ戦争に行き、人を殺めてしまったこと、戦争に行く前は花火職人だったことなど、交流がなければ絶対に知り得なかつた、いろいろなことを少年達は知るようになる。徐々に深まっていく信頼や友情。しかし、それらの変化、すなわち、「変わるもの」たちは、ある時、誰にでも例外なく訪れる「死」という生命誕生以来の「変わ

らないもの」によってピリオドを打たれる。目の前で横になっている体は、まぎれもなくその老人だが、もう二度と動くこともなければ、少年達と話すこともできない。生きていれば、もっと親しくなれたかもしれない。が、老人との交流の全てが老人の死によって永遠に変えることのできないものになってしまった。

しかし、少年達は老人との交流を通して、それまでとは大きく変わり、また、老人の死の後、どんどん変化していく少年達の周りの世界の中でも、「変わらないもの」である「老人との交流」をエネルギーにして、少年達はどんどん変わっていく。

これらのことから、僕は、「生きている」ということは、「変わる」ということではないかと考えた。死んだ人間の時は止まつていて、永遠に「変わらないもの」だが、生きている人間の時は常に流れていて「変わるもの」であり、時が変わるからこそ、人を取り巻く状況が変わり、そして人間が変わっていくのだと思う。逆に、生きていても、変わらなければ、それは死んでいるのと同じことではないかと思う。少年達に出会う前の老人がまさに「生きた屍」のようであったように。

僕は積極的に知識等を取り込んで、昨日の知識を得た今日の自分に、そして、今日の知識を得た明日の自分へと、どんどん変わっていけるような、そういう生き方をしたい。



『見知らぬわが町』

5年 建築学科

吉田沙織

「あなた達が卒業するのと同じ時に三池炭鉱はなくなります。」そう先生に言われたのが、私が炭鉱について覚えている唯一の歴史である。1997年3月30日、小学校を卒業する春に三池炭鉱は閉山した。この本の内容は、まだ三池炭鉱が動いていた1995年。著者の中川さんが高校一年生の夏のことである。

中川さんが偶然行った大牟田川河口に存在したのは廃墟のような奇妙な建物。それが持つ哀しい風景に魅了される。その異様な建物が「ヤグラ」という炭鉱施設だと知り同時に囚人の強制労働という事実も知る。初めは、アイドルの生写真を集めるように豊坑ヤグラの写真を集めようと思ったのがきっかけだった。徐々にのめり込んでいき、何かに取り付かれたかのように、夏の日差しの中を自転車で駆け巡った。炭鉱の足跡を求めて。

いつの間にか中川さんの心は、炭鉱施設から囚人墓地や与論島移民差別といったマイナスの歴史へ向けていく。強制労働を強いられ十分弔われることなく時代は移り、忘れ去られようとしている。中川さんは、今までの自分は、自分が迷子であることに気づいていない迷子のようなものだったと言う。

この本を読んで、私も大牟田に住んでいたながら炭鉱施設を見たことがないことに気付き、中川さんの行動に触発されて、「ヤグラ」をめざした。住宅街を抜けると突然ぬつとあらわれたのは宮原抗のヤグラ。周りからその部分だけ取り残されたかのように、そこにあった。そのヤグラの上には空しかなかった。暗い坑内に光を届けていたのだろう。次に訪ねたのは万田抗。木々の中に隠れるようにあり、今動いていても不思議でない程、様々な施設が残っていた。やはり、周りからは隔てられ孤独に立っていた。しかし、両方共実物だからこそその迫力や雰囲気を持っていた。中川さんが初めてヤグラを見た時に感じた「哀しい風景」がわかった気がした。

私は知らず知らずのうちに、炭鉱の歴史は暗くて恐ろしいことだという先入観をもち、マイナスイメージで決めていたことに気付いた。いわば食わず嫌いである。強制労働や炭抗事故など確かに悲しい暗い歴史があるのも事実である。しかし、そればかりではないと思う。顔が真っ黒でも笑っている炭鉱マンの写真、今では考えられないような狭さでの社宅生活でも楽しそうに暮らす人々の写真を見たことがある。明るい思い出もあるはずである。私はほとんど炭鉱のことを知らないし、関係ないことだと思っていた。だが、そうではなく、かつてここには炭鉱があり、今でもその足跡があることを誇りに思っていいのではないかと思う。この本が著された1995年、閉山した1997年、現在2004年、少しずつその足跡は薄れ、黒いヴェールをかけられ背を向けられつつある。このまでいいのだろうかと思い始めた。



『アンネの日記』を読んで

4年 機会工学科

原 口 直 也

僕は『アンネの日記』という本の事は知っていたけど、じっくり読んだのは、今回が初めてでした。アンネはユダヤ人であり、政府から迫害される立場で、隠れ家に住んでいる状態での日記という事なので、恐怖に怯えている内容ばかりだろうと思っていました。しかし、読んでみるとその想像は間違いだった事に気がつきました。その日記には、アンネという一人の少女の実像がありのままに記されていました。彼女の素直ではっきりとした気性、また、鋭い人間観察と批判にはすごく興味をそそられ、人間アンネ・フランクに魅かれました。隠れ家という、狭く、不自由で、恐怖に包まれた状況で僕達だったらどう過ごすでしょうか。やはり、一緒に暮らしている人達との秩序を守り、波風を立てないように静かに暮らすでしょう。しかし、アンネ達は、各自の主張をむき出しにして、ぶつかり合い、納得するま

でやりあうのです。その自己主張の強さと意志の強さに僕は感心し羨ましく感じました。

アンネは常に”自分の事を分かってくれる人は誰もいない”と感じていました。心にも思ってないような憎まれ口をたたき、みんなから、生意気だのお転婆だの高慢ちきだのいろいろな汚名をこうむる事を表には出さないけれど、悩んでいたのです。思春期の少女が一人で自分について悩むのはどんなに辛かったでしょうか。しかしアンネは”キティー”と名付けたこの日記帳に全て打ち明ける事で、心の平温を保ち、たくさんの苦惱や恐怖を乗り越えてきたのです。アンネは本当にたくましく、魅力的な女の子だと思いました。

アンネは、連合軍による開放を目前に収容所で息をひきとりました。隠れ家でのユダヤ人について、だれかが密告したのでしょう。こんなに恐ろしく、悲惨な出来事は決して起こってはいけないです。将来のある子供達をも殺してしまうなんて、そんな残酷な事がどうしてできるのでしょうか。アンネの残してくれたこの日記を無駄にせず、たくさんの人々に考えさせなければいけないと強く思いました。そして、このような事を二度と起さぬよう、一人一人の平和意識を強めなければいけないと感じました。



『野火』を読んで

3年 機会工学科 8番

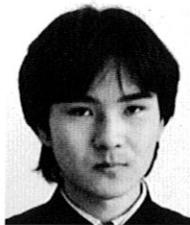
岩 崎 真 人

この作品は戦争が人に与える影響の大きさが描かれてあり僕自身大きな衝撃を受けました。自らが人肉常食者だったことや、罪のない比島の女や僚友を殺したことなどを隠さず打ち明けている作者は本当の意味で戦争の悲惨さを教えてくれたと思います。小学校の頃から戦争について様々な学習がありました。大抵は戦時中の貧困の話や戦争で親しい人が死んだ時の話などで、実際に戦争の最前線の話を知る機会があまりありませんでした。僕がこれを読んでまず思ったことは、戦争は人に死を予感させ、そのためには思考や感情を大きく変化させるということです。作品の中にもそのような場面が描かれています。

例えば、作者は生存への希望があると仲間の死に責任を感じていますが死を予感している時には笑って仲間を見捨て、また餓えによる死を感じた時には死んだ人間よりも生きている草花を食べる方が悪いことであると考えるなど普通の生活を送っている人間では到底理解し得ない狂人じみた考え方や行動を起こすのです。これは戦争が人を傷つけるだけでなく、精神にも影響を及ぼしているということだ

と思います。また、次に思ったのは、作品中の情景の描写が、詳しく細かいということです。それほど戦争つまり死への直面が人にその場面を印象づけているのだろうと思います。逆にそのくらい周りに気を配っておかないと生き残っていけないのかもしれません。このようなところから戦争の中で人がどういう状態になるのかが窺えます。そして僕がこの作品で一番印象に残った場面は、作者が飢えのあまり人肉を食べようとした時、人肉をつかんだ右手を自らの左手が無意識につかみ、人肉を食べさせまいとしたところです。飢えの中で、生きようとする本能で動く右手を理性で動く左手が押さえ込んだのです。この場面は僕に人間が本質的には理性で生きており、他の動物と違っているということを改めて認識させてくれました。戦争という極限の状況は人に自分自身の本質的な部分を見せてくれます。それほど悲惨な状況なのだと思います。

戦争が終わり、作者は静養している時、食前に、殺され食べ物になった生物に詫びることをするようになりました。この一種の儀式は、作者が戦争を通して生命の尊さを知ったために行われるようになったものです。戦争で失うものは大きく、得るものは何もありません。しかし教訓を学ぶことくらいはできます。生命の尊さ、これが作者にとっての教訓だったのだと思います。僕もこの作品を心に留め、この作品を通して感じたことや思ったことを教訓にできたらと思います。



『蹴りたい背中』から

3年 電子情報工学科 16番

志垣 祥太郎

若くして文学界に名を知られる筆者の文章に少しの興味を覚えて手に取ったこの一冊だが、なにぶん活字嫌いの自分が読破出来るかという一抹の不安は読み始めて直ぐに消え去った。

僕は直ぐに文章に惹き込まれた。其処には日頃自分が思っている事が多く書かれていたし、何より共感出来得る主人公がいたからだ。

さて、この作品は主人公の「初美」と級友の「にな川」の交流を描いているが、二人の共通点はクラスの余り者だという事である。全く接点の無い筈の二人を結び付けたのは、あるファンションモデルだった。

先程、僕が初美に共感を覚えると言ったが、これは僕自身がよく孤独を感じ、其れにさいなまれているからだ。どういう訳か年を重ねるにつれて不安定で陰々たる性格を呈する感のある僕は、気が付くと人と和する事を恐れ、苦手になっていた。初美には絹代という中学からの友達がいるが、新しい仲間と楽しげに過ごす絹代に初美は複雑な思いを持つ。絹代とは一緒にいたいが、彼女のグループの中に入るのは気が進まない、という。「一人でしゃべってると、何をしゃべってても独り言になってしまふ」と初美は言つ

ている。当たり前だと思われるかもしれないが、独りになると普段なんでもない事がとても惨めで苦しい事に変わる。友達と話をすれば直ぐ過ぎる時間を一人で潰す苦痛…それを苦痛と思うのは独りは嫌だと思っている証拠だが、だからと言って互いに繋い合うグループに入って「薄まる」のは嫌なものだ。そういう考え方について僕は初美に共感を持った。

この作品で僕は一つ疑問を抱いた。それは随所に表れる初美のにな川に対する感情だ。時に彼を傷つけようと言えども、「愛しさよりも、もっと強い気持ち」とは何だろうかと僕は悩んだが、僕自身の経験から自分なりの解釈をさせて貰う。昨年、僕は旧友と偶然出会い、親しい間柄になった事がある。初美とにな川とは多々違う所はあるが、共通する事は寂しさを感じている時に出会い、会う様になったという点だ。初美にとってにな川は数少ない、交流のある人間であり、たとえにな川が初美など見ていなくても、彼女にとってはかけがえのない存在だといえる。唯、人と深く付き合っていない初美はにな川の事を知り親しくなるにつれ、戸惑いの様なモノを感じているのではないだろうか。

読み終えて、初美とにな川はこれからどうなるのだろうと考えた。初美にとってにな川が、孤独を紛らすだけの存在で終わるのか。それとも、初美に友達が出来るのか。それは分からぬ。

この作品を通して、自分の心を改めて見つめ直す事が出来たし、誰しも孤独を感じる時期があると思えば少し楽になつた気がする。自分が独りだと感じる事の多い人には一読を勧めたい一冊だ。

分の所為ではないと、逃げ場をつくり、心の痛みを避けると思う。

強い信念を持つ者程、その信念を貫けなかったとき、とてつもなく大きな羞恥心を持つだろう。Kは、恋愛は道の妨げになるという信念を貫けずに、自分自身を責め、自殺したのだと思う。失恋のショックではなく、自分が信じてきた道を失い、自分自身が一体何なのかわからなくなり、先の道も見られる見込みがないと判断したのだろう。

「あれだけ恋愛は道の妨げになると言っていたのに、お前が一番恋に自惚れている。」

周囲の人、特にKの信条を最も知る先生からそういう事を思われているのではないかと思うことからくる恥ずかしさ、有言実行を成しえなかつた自分の腑甲斐無さに苦しんで苦しんで命を絶つたのだろう。

『こころ』を讀んでいると、私自身、私が生きている事に罪の意識を感じ、ただ臆病に過ごしている所為か、先生やKに共感を覚えた。私も誰か、「私」のような自分の全てを有りの儘に語れる人が出来たら、心残り無く死ねるのだろうか。それともKのように、もっと早く死ぬべきだのに何故今まで生きていたのだろうと思い死ぬのだろうか。今ままの私では、Kのような思いで此の世を去ることになると思う。然し、私は先生のように愛せる人と過ごした後、逝きたい。その為には、信念が貫けなくて挫折してもひたすら立ち直り、力強く突き進まなければいけないと思った。この本は、生きる事の苦悩と希望、両方を感じてくれた。



『こころ』を読んで

3年 物質工学科

渡邊 千華

「死んだように生きること。」

それは苦しみの中で生きることで、精神力がないとできないように思うが、ただ死ぬ勇気がない臆病者がすることのようにも思える。自己呵責の念を生涯貫く事で、心は常に潰され続けるだろう。そんなに自分が生きる資格の無い人間だと思うのならば、先生は何故もっと早く自殺しなかったのだろうかと初めのうちふと思ったが、愛する妻を独り残して去る事ができなかったのだろう。愛すべき人が彼の心を臆病にしてしまったのだ。あれだけ生きる事に抵抗を持つ先生に、生きていく力を与えたのは妻であり、死ぬ事への勇気、決意する力を与えたのは、「私」であると思った。本文中に

「人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の懷に入ろうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、—これが先生であった。」

とあるが、孤独に見える先生は、本当は誰よりも周囲の人の心を思い遣ったり、周囲の人からの信用を求めていたのではないだろうか。

親友Kの自殺が自分の所為なのだと生涯思い続けたという事からも、先生の慈悲深さがわかる。そうでなければ、自



『蹴りたい背中』を読んで

3年 建築学科 22番

榮 寛子

私達には一人一人に個性があると思う。この本を読んで改めて感じたことである。

ハツは高校でクラスに馴染むことができずに、ふいに自分と同じような人を探すが、実際に同じようなことは私の周りにもあるような気がした。友達がいなくてクラスでは仲良しな人同士が組をつくってしまっていると、自分が一人なのかと思って不安になる。そして、同じ「立場」の人がいないかをつい探してしまう。ハツの気持ちがよくわかるような気がした。やはり、孤独だと平然を装っていても悲しいだけで、嫌な気持ちになるだろうと思う。そんな中で蜷川を見つけたハツは安心するのだ。同じ境遇の人が見つかるがハツの不安は消えなかったと思う。実は蜷川がとても個性を持っていたからだ。

私が考える個性とは人が持つ特徴であり、雰囲気である。しかも自分の気持ち次第で変わるものではないかと思う。自分はこういう人だからと決めつけていると、勝手に自分

のイメージができてしまうように。これは嫌ではないか。いくら何もできない不器用な人もそれが個性だとしても、自分らしさを持っている。何もない人はいない。

ハツは自分らしさがない、と思っている女の子だった。蜷川を見つけて一人じゃなかったと安心するが、蜷川の持つ個性を見てどう思ったのか。きっと不安と孤独で複雑な気持ちだろうと思った。もし私がハツと同じ立場であったなら、やはり同じことを考えたし、塞ぎ込んで何も考えなくなりそうだ。しかも何もない自分に自分が嫌になるだろう。

どうしてハツは蜷川の背中を蹴ったのだろう。初め、私は全く分からなかった。ハツは一体何を思って蹴ったのか。きっとそれは、ハツがもっていないと思っていた「個性」を同じ境遇だと思っていた人が持っていたからではないかと思った。個性があって、夢中になれるものがある蜷川に腹が立ったのか、それとも、羨ましかったのだろうかと思った。もしかしたら、変われない自分にもどかしさを感じていたのかもしれない。

自分らしさは、自分で変えていくものだと思う。この本を読んで、ハツのもどかしさがなんなく分かったのは、自分も実際そうだからだと思う。自分の気持ち一つで雰囲気も変わっていくし、周りも自分らしさを見てくれるようになるのだろうと思う。



『宣戦布告』から

2年2組 26番

乗富 聰一郎

国を守る、という事について、どう考えているだろうか。なぜ冒頭からこの様な事を問うかといえば、別に愛国だとか護国について語りたい訳では無い。偏にこの『宣戦布告』という作品から、国家の重責を担う人々の、そして国民個々の自國を守らねばならないという意識や自覚に対し、疑惑と懸念、そして大きな危惧を抱いたからである。

事の発端は、原発の密集する敦賀半島に、国籍不明の小型潜水艦が座礁しているのが発見された事だった。その後、乗組員の一人が拘束され、その証言や艦内の遺留品から潜水艦が北朝鮮の物である事と、十一人の完全武装の特殊部隊員が侵入・潜伏している事が判明する。時を追う毎に事態は混迷の度を深め、警察SAT部隊、陸上自衛隊と次々に投入されていく。しかし、その意思決定の過程や作戦を指揮する段階での、国家の中枢に座する者達の、保身第一としか見えないその言動と態度には、正直愕然とさせられた。

SAT部隊においては、当初出されていた敵射殺の許可を、警察が容易に多数の人間を殺傷しては政治に混乱を来すから、という信じ難い理由で撤回してしまった。結果、任務中の部隊の混乱を誘発し、敵からの攻撃を受け、隊員一人が余りにも無惨な最期を遂げた。陸上自衛隊においては、

連立与党や護憲を謳うジャーナリストの横槍によって、武器の使用は逐一現場指揮官の許可を得よ、との命令が下った。その無謀な命令があったが故に、十分な応戦もできないまま許可を待つ間に、隊員が次々と敵弾に倒れ、絶命していった。

確かに、政治の世界には僕が如き一般人には到底理解し得ない、虚々実々の駆け引きもある事であろう。しかし、人命が懸かっている様な状況下で、その人命よりも優先すべき事柄が、一体どこに在るというのだろうか。

事後、殉職したSAT隊員の遺骸を前に、SATの部隊長は現場の指揮責任者にこう噛み付いた。『何故射殺命令を解除したんですか。そうで無かつたらコイツは死ななくて済んだんだ!』この悲痛な言葉にも、責任者は『俺のせいじゃない』と自己擁護の言葉を浮かべるのみだった。何という無責任さだろうか。最早憤りを通り越して呆れる程である。

この作品はフィクションである。しかしながら、この作品で示されたような有事が、そしてその後の余りにも悲惨な事態が、現実の物とならないとは、断言出来ない筈である。

たった一隻の潜水艦が座礁しただけで、首相が辞任せねばならないような事態に陥る様な国家というのはどこか異常ではないだろうか。僕の危惧でもあり、作中の記者が呈したこの質問に対し、作中の時の総理大臣は、引責辞任に際した応答の最後に、こう答えた。

『安心したまえ。この国が異常だと思っているのは、君だけじゃない』と。

あなたは、どう思うだろうか。



『人間失格』を読んで

2年5組

谷口 恵利佳

『人間失格』この僅か4文字が私の興味を強く引いた。以前から太宰治の文学には大変関心があったし、好き嫌い、肯定否定があるにせよ読む者の魂に不思議な魔力をもって生々しく迫ってくる文学者としての魅力を太宰が持ち合わせているのだという事を、他にもならぬ私自身が深く感じていたからだと言ってもいいだろう。この作品を読み進めていく中で、この世から本質的に疎外され、自閉的世界に住む人の魂の底からの人間への真の求愛、救信の訴えを読み取る事が出来た。

この作品には、他人ならまだしも、友人や自身の家族でさえも信じる事が出来ないある一人の男の苦悩が事細かに描かれていた。道化をする事でしか人間とつながる事が出来ずその影響から本当の事を生涯口にする事がないまま成長し、周りの人間の感情を上手く利用する事でしか自己を形成する事が出来なくなってしまった男の哀れな末路。それは現在の人間にも重なる部分が多くある。人の死という出来事

が日常茶飯事となった今日、その出来事に慣れ、鈍感になってしまった自身も「人間失格」という言葉に当てはまる物があるだろう。太宰治という文学者が作品を通して自分達の心情を代弁してくれているような気にさせなった。人の心の奥底を浮き彫りにしたとも言える。誰しも心底では人を真に愛し、信じたい、自分を偽らず眞実に生きたい、弱いけれど人々の味方になりたいというような感情があるのではないかと私は考える。人から嫌われる事を極端に恐れ、自分を良く見せようとする行為がそういった感情の表れではないだろうか。素直に感情表現すると、相手の考え方とくい違い衝突してしまうのではないかと気持ちを伝えられない事がある私もその感情は大いにあると断言できるだろう。そういう点からこの作品の主人公に近からずも遠からず何かを感じた事もこの本を手にした理由の一つかもしれない。私はこの作品に何を見出そうとしたのだろうか。作者は自殺という作為の先に何を伝えようとしたのだろうか。大きな疑問が二つ残った。地球上に何十億もの生命体が存在するように定まった答えなどないだろう。だが一つだけ言うとすれば、人を信頼し尊敬するという事が人にとってどれだけ重要でどれだけ不可欠な物であるかという事を深く心に刻んだ作品となった事は事実である。



『赤毛のアン』を読んで

1年 物質工学科

田中 理佳子

最初に「赤毛のアン」を読んだのは小学5年生の時だった。夢中になって読んだ。アンのすばらしい空想する力にあこがれたからだ。アンのように通学路にロマンティックな名前をつけてみたり、アンが成長したように自分もコンプレックスを克服して、美しく成長するんだと思い込んだり。何度も繰り返し読んで、ギルバートや、ダイアナ、マリラや、マシューが自分の周囲の人達のように感じていた。

この夏休み、久しぶりにまた読んでみた。もちろん、アンの愛情深く、がんばり屋でつらい時も空想して明るく乗り切っていく姿はやっぱり魅力的だった。しかし、一番心に残ったのはアンの住む「アヴァンリー村」と「グリーンゲイブルス」だった。そばかすだらけでやせっぽちの赤い髪をしたアンを豊かな島の自然が愛すべき少女に育てていったのだろう。アンがダイアナと一緒に町から帰ってきた場面、サフラン色の空と黒ずんだアヴァンリーの丘、海からのぼってまた月が輝き道の曲がりめごとにある小さな入江にきらきらおどるさざなみ、そして小川の丸木橋をわたると、グレー

ンゲイブルスの台所に灯がともる。暖かな家でアンを待つやさしい二人が想像できるではないか。また、森に光線がエメラルドのような葉の間を幾重にもくぐってさしこんでくる。すずらんや真紅の草の実が茂り、小鳥がさえずりをかわし、風がひそひそさやきあったり、笑ったりする「樺の道」——そこは通学路なのだから、学校へ行くのもどんなに清々しいことだろう。「喜びの白い路」「かがやく湖水」「恋人の小径」「妖精(ドライアド)の泉」島の美しく移り変わる自然の中で起きる事件が、私をもアンの空想の世界に引き込んでいく。アンの厳しい境遇もこの島の自然の豊かさと、素朴なアヴァンリーの村人、友人達の愛情で前向きに生きていく力を与えていったのだ。作者のモンゴメリが生まれ育ったカナダのプリンス・エドワード島、この島がモデルになっているという。アヴァンリー村のモデルであるキャンベンドイッシュ村一帯が国立公園になり、グリーンゲイブルス、かがやく湖水などが残っているらしいので、いつかこの島へ行ってみたい。おしゃべりなアンや愛情深いマリラ、マシューが現れるかもしれない。アンへのあこがれが、自然へのあこがれも生み出した。久しぶりにアンの世界へ入っていって、アンの生き方や自然に、単純に感動してしまった。

この夏休み、アンの物語の続編をもう一度、全て読み返してみたいと思った。アンは私の大切な「腹心の友」だったのだから。

図書館統計

平成15年度利用状況

開館日数277日

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
開館日数	24	24	25	23	21	24	25	22	22	22	23	22	277
入館者数総数 (内夜間)	5,665	7,166	8,099	6,178	3,716	7,450	6,220	7,005	5,630	5,311	7,053	2,490	71,983
(内土曜日)	(929)	(1749)	(1425)	(1047)	(0)	(1707)	(1253)	(1727)	(993)	(1008)	(1286)	(84)	(13208)
1日平均	(204)	(281)	(356)	(158)	(0)	(379)	(260)	(452)	(276)	(251)	(320)	(0)	(2937)
貸出冊数総数 (内夜間)	773	952	620	811	296	493	846	839	569	608	466	215	7,488
(内土曜日)	(235)	(316)	(83)	(206)	(0)	(147)	(235)	(262)	(129)	(172)	(119)	(5)	(1909)
1日平均	(48)	(59)	(14)	(18)	(0)	(48)	(54)	(57)	(50)	(34)	(44)	(0)	(426)
	32.2	39.7	24.8	35.3	14.1	20.5	33.8	38.1	25.9	27.6	20.3	9.8	27.0

分類別図書貸出冊数の推移

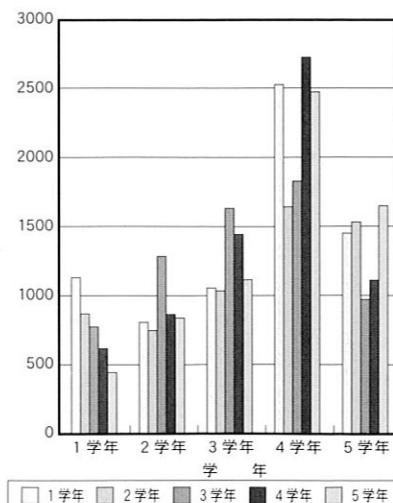
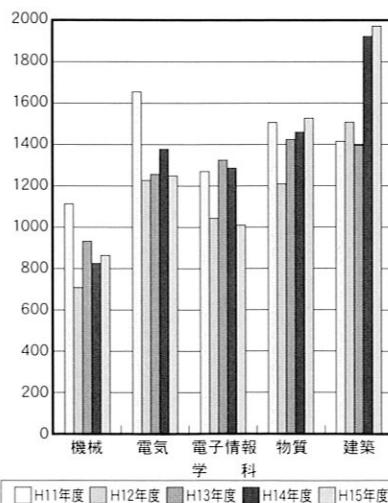
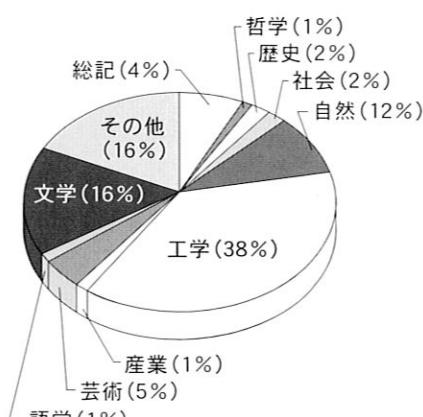
年 度	総記	哲学	歴史	社会	自然	工学	産業	芸術	語学	文学	*その他	合計
平成11年度	401	97	236	137	931	2,838	184	656	95	1,507	546	7,628
平成12年度	232	102	180	122	784	2,391	101	209	52	1,124	996	6,293
平成13年度	207	77	192	138	943	2,520	67	443	44	1,376	1,459	7,466
平成14年度	274	92	183	124	929	3,099	96	299	53	946	1,726	7,821
平成15年度	283	70	113	72	907	2,995	34	208	61	924	1,891	7,558
平 均	279	88	181	119	899	2,769	96	363	61	1,175	1,324	7,353

*「その他」は、文庫・新書および雑誌の貸出冊数を示す。

利用状況の推移

年 度	開館日数	利用登録状況				入館者数			貸出冊数			1日当たりの数値			
		総数	(内学生)	(内教職員)	*内学外利用者	総数	(内夜間) (土曜日)	総数	(内学生のみの貸出冊数)	(内夜間) (土曜日)	*内学外利用者	1日当たり入館者数	1日当たり貸出冊数	学生1人当たり貸出冊数	利用者1人当たり貸出冊数
平成11年度	275	1,312	1,038	185	89	81,366	14,229	7,628	7,013	2,352	112	295.9	27.7	6.8	5.8
平成12年度	265	1,216	992	156	68	68,633	11,848	6,293	5,813	1,771	100	259.0	23.7	5.9	5.2
平成13年度	279	1,304	1,043	187	74	80,735	12,658	7,466	6,815	1,898	87	289.4	26.8	6.5	5.7
平成14年度	277	1,288	1,044	182	62	75,466	14,903	7,894	6,876	1,906	407	272.4	28.5	6.6	6.1
平成15年度	277	1,312	1,065	179	68	71,983	16,145	7,488	6,617	2,393	123	259.9	27.0	6.2	5.7

分類別貸出冊数(平成11~15年度平均) 学科別図書貸出冊数(学生のみの数字) 学年別図書貸出冊数(学生のみの数字)



郷土の文化財

福岡県指定有形文化財 旧戸島家住宅 柳川市鬼童町

当住宅は、柳河藩で中老職等の要職を務めた吉田舎人兼儒の隠居後の住宅として建てられました。

平成13年度から15年度に行われた修理の際に文政11年（1828）の墨書きが発見され、諸記録・建築様式から当住宅はその頃の建築と考えられます。建設後、藩主の立花家に献上され、明治15年頃に戸島氏の所有となりました。

敷地南側には掘割の水を引いた池と築山等で構成された庭園（国指定名勝）があります。それに臨む4.5畳の座敷には畳廊下・縁側が付設され、更に土庇が設けられ、室内と庭とを繋ぐ豊かな空間がつくられています。

室内に長押はなく、面皮柱、半丸太の棹縁、竹の床柱・落し掛け、色土壁、等が用いられており、草庵風で瀟洒な建物に仕上がっています。

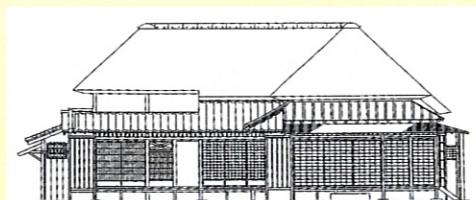
茅葺の屋根は、庭園側からはL字形、北側の道路側からはコの字形に見えます。機能で分けると式台玄関・座敷・3畳の次の間・3畳の茶室から成る接客棟と、仏間・寝室・玄関等から成るL字形の居室棟とが繋がった構成と考えることができます。

当住宅は、建物・庭園・掘割という柳川独自の美しい「文化的景観」を保つ貴重な遺構です。平成16年4月から一般公開が行われています。近くには旧立花家住宅（御花）、北原白秋生家、掘割があり、柳川の素晴らしさを堪能することができるでしょう。

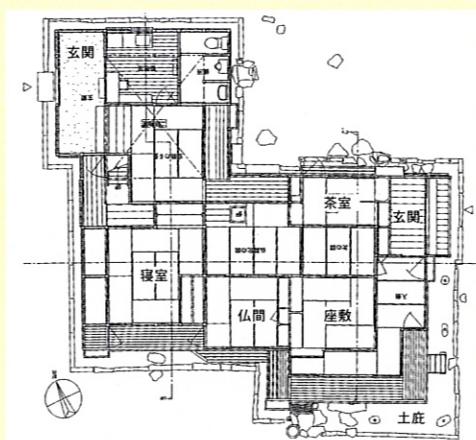
（建築学科 松岡高弘）



庭園から見た住宅(南・東面)



南立面図（柳川市教育委員会所蔵）



一階平面図（柳川市教育委員会所蔵）



東・北面



茶室の入口部分



座敷から庭園を見る

編集後記

図書館報第10号をお送りします。平成7年に発刊された「図書館報」もついに10号を数えるようになりました。これは多くの情報を寄せ、たくさんの方々の原稿を寄稿していただいた執筆者と楽しく読んでいただいている読者の皆さんのおかげだったと思っています。第1号から見直していくと、多くの出来事があり、図書館もずいぶんと様変わりしています。また、「図書館報」自体も内容が豊富になり、カラーページも増えてます。これからも皆さんと図書館とをつなぐパイプとして、「図書館報」をよろしくお願いします。